

# 景観からみた大阪の街理解の方法

—古地図アプリを用いて—

岡 絵理子

## How to understand Osaka city from the viewpoint of landscape —Using the old map application—

OKA Eriko

In this paper, we show practically how to use “*Osaka Kochizu Burari*”; the old map application which has been developed as Toul to understand a city. We conducted events to walk around the city and asked to the participants. Although effective as guide's information tool, it was pointed out that there was too much information for the participants and the danger of operating a smartphone while traveling.

Based on these, we showed a case of "Time Dive" focusing on the moat in Osaka. It is clear that although the moat has been reclaimed and turned into roads, the base terrain remains the same, so the viewpoint remains and the historical resources of the past are now the new landscape resources.

キーワード：景観 (Landscape)、古地図アプリ (Old map application)、大阪 (Osaka)、  
「大阪こちずぶらり」 (“Osaka Kochizu Burari”)

## はじめに

風景はいつの時代にも存在し、また時間の経過とともに新しい風景が現れる。そしてその風景を上書きするようにさらに新しい風景が現れる。私たちを取り巻く環境はその意味では刻々と変化し続けているのである。

ある時期の風景の表層を記録したもののひとつが地図である。地図の表すものは地形であったり、土地利用であったり、建物であったりと様々であるが、そこにその時期存在していたもの、風景としてあったものが表層として記号化され示されている。また、絵図や風景画も表層の記録である。それはある時点の風景の表層の記録ではあるが、写真とは異なり記録者の意図が含まれており、生き生きとしてそこに存在していたものが記録される。醜いもの、後世に語り継ぎたくないものは敬遠され、記録されることはない。様々な過去の地図を使って時空を行き来すること、これを鳴海邦碩は、中沢新一の「アースダイブ」に倣って、「タイムダイブ」、「タイムサーフィン」と名付けている。鳴海は「時代時代の景観の層の間を泳ぎ回ると、新たな環境や景観に発見がある」と語る。そのツールとして、2016年「大阪こちずぶらり」というアプリを開発した。このアプリの活用方法と、その成果を示す。また、このアプリを活用した「タイムダイブ」による大阪の街理解の事例を2つ示す。これらから、古地図アプリの課題と可能性を示す。

### 1 古地図アプリの概要

「大阪こちずぶらり」はスマートフォンで扱える古地図アプリである。大阪の古地図5枚と現在の地図1枚、さらに衛星画像、これらに加え大阪の絵図2種類が搭載されており、GPSと連動している。6枚の地図と衛星画像を行き交うことができ、さらにその地点での2種類の絵図を見ることができる。

(1) 収録地図リストは下記の5枚と、現在の地図、衛星画像である。

- ① 大坂三郷及周辺図 (17世紀中頃)：摂津、河内、和泉国の広い範囲を描いた肉筆の大坂の地図である。丹波篠山市の青山家に保管されていた地図で、職務を通じて大阪城城代青山宗俊の手に渡ったと考えられる。行政のための地図である。丹波篠山市教育委員会所蔵。
- ② 新撰増補 大坂大絵図 (1687年頃)：京都の板元が作成した大坂図。木版刷りの地図であるので、町人に普及していたと考えられる。大阪歴史博物館所蔵。
- ③ 正式2万分1地形図 (1908年頃)：明治中頃から、大日本帝国陸軍参謀本部陸地測量部により三角測量に基づき作成された。日本における最初の本格的な近代地形図である。特に、

建物の位置が正確であり、また土地利用、地表の状態がよく読み取れる地図となっている。

- ④ 米軍撮影空中写真（1948年）：第二次世界大戦後の1948（昭和23）年12月、米軍が撮影した空中写真である。大阪の市街地は、終戦の年である1945（昭和20）年3月13日から8月14日まで8回の空襲を受けており、全市域の27%にあたる50.49km<sup>2</sup>が被災した。被災家屋は34万4,240戸である。その被災状況がよくわかる写真である。国土地理院所蔵。
  - ⑤ 市街化過程および戦災図：大阪市が1974（昭和49）年に作成した「市街地発展図」をデジタル化し、さらに「大阪市戦災焼失区域図」（日本地図株式会社、1946年4月）に示されている「戦災焼失区域」を重ねた地図である。戦災までに形成した大阪の市街地が1887（明治20）年、1907（明治40）年、1923（大正10）年、1940（昭和15）年の4段階で塗り分けられており、焼失地域を重ねることで、焼け残った戦前の街の位置を確認できる。
- (2) 収録している2種類の絵図とは、下記の2つの一連の絵図、絵画である。
- ① 「浪花百景」：3人の絵師 歌川國員、中井芳滝、森芳雪によって描かれた100枚の上方浮世絵木版画（錦絵）で、幕末に大坂の版元「石和」より刊行された。名所である街の様子や人々の姿が生き生きと描かれているのが特徴である。
  - ② 「明治・大正 大阪百景」（保育社、1978年）：野村廣太郎が描いた明治・大正時代の風景画、50枚である。野村廣太郎は1904（明治37）年生まれ、エンジニアとして仕事をしていたが、50歳位を過ぎた頃から大阪図絵を描き始めた。大阪生まれの大阪育ちで、目に焼き付いた景色もあるが、描きたいと思った場所に出向き、自分の知っている風景とその場でのヒアリングや古い写真などを合わせて、明治・大正に思いを馳せながら絵を描いたとのことである。大阪市立美術館所蔵。
- (3) アプリ「大阪こちずぶらり」の特徴として、次の2点をあげることができる。

- 実際には物理的には重ねることができない、互いに歪みがある地図や航空写真を、地点間の数学的処理でシステム化することにより、地点ごとに重なるようにブラウザーに示すことができる。
- クローズアップ機能が効果的に使える。大判の地図に目を近づけて見ることはきないが、この地図アプリでは精度の高いスキャン画像を用いているので、ブラウザーで拡大して明瞭に見ることができる。

## 2 古地図アプリの活用 まちあるきイベント

このアプリを活用した街理解の方法として、地域の歴史を知る「まちあるき」イベントを実施した。

まちあるきイベントは、2017（平成29）年2月23日、2017（平成29）年3月9日、2017（平成29）年6月10日の3回である（表1）。

表1 古地図アプリを活用したまちあるきイベントの実施概要

実施日時	まちあるきの場所	参加者	参加者の概要	人数
1回目 2017/2/23	中之島・北船場地域	JUDI理事メンバー	都市デザイン、都市計画、まちづくりに関わる専門家	10名
2回目 2017/3/9	大阪水の回廊めぐり（船）	研究会メンバー	大阪町歩きツアーを実施している OSAKA 旅めがねエリアクルーメンバー、観光化されていない大阪を見出す「NPO もうひとつの旅クラブ」メンバーを中心とするまちあるきの専門家	6名
3回目 2017/6/10	大阪天満宮周辺	船場あるき隊	船場でまちづくり活動を実践しながらまちあるきを進める市民活動家	7名

第1回は、都市環境デザイン会議（通称JUDI）という都市環境デザインに関わる様々な分野の人々が集結した学術団体に所属するメンバー10名が、本アプリの製作者の一人の案内で、アプリを使いながら中之島、北船場をまちあるきした。幕末から続く老舗を訪ねたり、通りの由来などの説明を聞くなど、案内人が先に古地図アプリを使って話題を仕入れ、その説明を受けながらアプリで確認しながらまちを歩いた。満足度は大変高かったが、実際はアプリを見ながら歩道を歩くことで、他の通行人の迷惑になることがあった。また、一つのスマートフォンで写真を撮ったり、地図に戻ったりが煩雑である、方角がわかるようにスマートフォンを地面と並行に持つと、明るすぎて画面が見にくいなど、課題が明らかとなった。しかし他の町にもこのようなアプリが欲しいとの声が多く聞かれた。

第2回目は、1回目の反省から歩くのではなく、アプリを使いながら船で移動した。参加者は、大阪まちあるきツアーを実施しているガイド（エリアクルー、国内旅程管理主任者資格を持つ）である。互いにそれぞれ得意とする地域を持っているため、ガイドは必要なかった。夕方に実施したため、スマートフォンの画面はクリアに見えたし、歩くのとは異なり人とぶつかるなどトラブルはなかった。しかし、一つの船に6人が乗り、それぞれが自分のスマートフォンを見つめることになってしまった。また、船を楽しむことが十分にできなかったとの声もあった。一人ずつが画面を見るのではなく、みんなで見る画面が船についていたら、会話が生まれよかったのではないかと提案があった。

第3回目は、日頃から船場でまちあるきを楽しんでいる「船場あるき隊」の方々にアプリを使って天満を歩いてもらった。案内人はあらかじめ天満について古地図アプリを使って学び、

当日に備えた。アプリを見ながらまちあるきをするには集中力がもたず、案内人の声だけを聞いて十分楽しめたとの声や、地図だけではわからないエピソードを案内人が語ってくれたのがよかったとの声もあった。また、紙媒体の方が書き込みもできて使いやすい、歩きながら見るのはつらいとの課題も明らかとなった。案内をする立場からは、個人によって街の理解度は異なるので、参加者で共有するのが難しいし、実際に目に見えないものを案内する難しさもあるとの意見が得られた。

今後のアプリの展開として、複数の地図が透明に重なれば面白い、ポイントを示すフラッグが大きすぎて地図が見えにくい、などアプリの改善が望まれた。

以上のように、参加者のまちの理解度にもよるが、実際にイベントとしてまちあるきをしながらアプリを見ることは難しいことがわかった。むしろ案内人が街を理解する方法として、あるいは自分たちの街の歴史をより深く知るため、また自分たちの歴史を紐とくツールとしては、大変有効であることが指摘された。そこで、ある地域や町の要素を、古地図アプリを用いて紐解くことにより、大阪の街の理解を深める事例を2つ示す。

### 3 古地図アプリを用いて地域を紐解く 事例1

#### 天王寺御蔵の入堀川、難波御蔵の新川をたどる

大阪日本橋にある文楽座の裏、西側に大阪府住宅協会が建てた5階建ての道頓堀ビル(図1)があった。図は竣工時のもので、色あざやかな壁画が描かれていた。1階は店舗、2階はオフィスで、3階から5階が賃貸の共同住宅であった。1956(昭和31)年竣工し、2017年に解体されている。このビルの設計者に話を伺ったことがある。ビルの裏は堀だったので、そのことを意識して設計したとのこと。地図を見ると、ビルの背後には不思議な3本の道があり、千日前通を横切り、さらに南下して、カーブを描いて直角に曲がっている。川筋のように見える。

まず、1900年ごろの正式2万分の1地形図で確認する。道頓堀から南下する堀が描かれている(図2)。この辺り一带は今と同じ高津という地名であった。しかし千日前通がない。

1912(明治45)年1月16日、南の大火が起きた。南地五花街の一つである難波新地の貸座敷「遊楽館」から火が出た。風に煽られ火は東に広がり、生魂神社や高津尋常小学校まで被災した。消失戸数約5000戸、死者は4名だった。この焼け



図1 道頓堀ビル



跡に、広幅員の市電道路が作られた。それが千日前通である。

大阪は日本で初めて公営による電気鉄道である市電（路面電車）を走らせた。1903（明治36）年のことである。その後都市計画道路としての道路拡幅とともに、市電道路が整備された。1966（昭和41）年全線撤廃されるまでの37年間、大阪の主な交通手段は市電であった。

千日前通りの西の端は今の地名では桜川で、実際に川が流れていた。桜川は道頓堀と並行して掘られた灌漑用水で、これを埋め立て市電道路とし、千日前通りとなった。ちなみに、この火事を契機に南地五花街は廃止され、現在の飛田新地に移された。

遡って、1687（貞享4）年年の大坂大絵図を確認。日本橋筋はあるものの、堀が見当たらない。

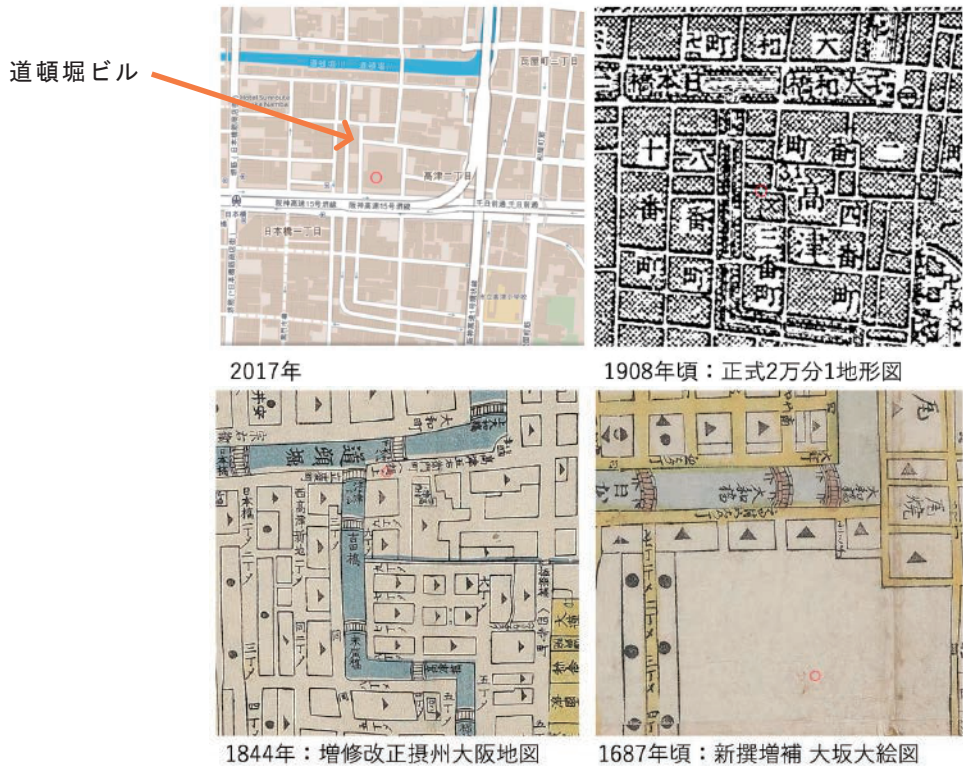


図2 堀を地図で確認する

日本橋は道頓堀にかかる橋、日本橋からきた町名である。1687（貞享4）年の地図では、「長町」とある。この南北の通りは紀州街道であり、旅籠や木賃宿が並んでいたという。

1844（天保15）年の地図では堀も確認（図3）、日本橋の町名も確認できた。道頓堀川沿いに、高津五右衛門町、立慶町、西高津新地の町名が読み取れる。この一帯を「高津新地」という。「高津新地」は、1733（享保18）年に、備前屋善兵衛と福島屋市郎右衛門が幕府の許可を得て開発し、1734（享保19）年、長さ439間、幅9間の高津入堀川を開削し、漕運の便を得た。堀にかかる吉田橋南から東に伸びる細い水路があり、現在の松屋町筋との交点に「極楽橋」がかかっている。寺町への入り口に当たるところなのでこの橋の名前がついた。「極楽橋」は今の地名にはなく、瓦屋町3南の交差点である。この堀をさらに南に下って見ていくと、その先に「天王寺御蔵跡」との記載がある。



図3 難波御蔵と天王寺御蔵  
(1844年増修正撰州大阪地図)



図4 浪花百景に描かれた  
「長町裏遠見難波御蔵」

「天王寺御蔵」は、高津新地の南にあり天王寺領にあったので「天王寺御蔵」と呼ばれた。別名「高津新地御蔵」とも言う。災害時の救援米貯蔵のための蔵として造られた。1752（宝暦2年）3月に造営にかかり、東西71間、南北90間の敷地であった。先に記したように、高津入堀川は1734（享保19）年におよそ790mの長さで開削されているので、すでにできていた堀の行き止まりに「天王寺御蔵」ができたことになる。

「天王寺御蔵」ができる以前1740年（元文5年）に、京都銀座年寄の徳倉長右衛門と江戸銀座年寄の尾本吉右衛門によって、高津入堀川の堀止付近に天王寺銭座が設置された。翌1741年（寛保元年）から短期間ながら銅銭が铸造されていたとのことだ。その跡地に天王寺御蔵が建てられた。しかし、1884年の地図にあるようにこの時には、蔵はすでに跡地となっている。実は、大阪の救援米貯蔵のための蔵は2つあった。天王寺御蔵に先駆けて建設された難波御蔵（図4）



である。

1732（享保17）年、享保大飢饉が起こった。この年の夏、冷夏と害虫で、中国・四国・九州の各地、とりわけ瀬戸内海一帯が凶作に見舞われた。この年の収穫は例年のわずか27%となり、死者12000人、250万人が飢餓に苦しんだと言われている。これに際し、敷地東西70間、南北180間、米蔵8棟の難波御蔵が建設され、道頓堀川よりここに至る水路が開削された。この開削工事は、一帯の貧困層に職を与える意味もあったので、できた川は新入堀川、難波新川とも呼ばれたが、極貧堀とも言われた。「天王寺御蔵」は、この「難波御蔵」に倣って造られたものであった。規模はおよそ半分。しかし「天王寺御蔵」は、多湿で米の痛みが早かったため、1791（寛政3）年に廃止され、「難波御蔵」に新御蔵が増築され統合された。「難波御蔵」には、新川を使い新田会所から米蔵に租米が運搬された。その規模の大きさから名所にもなっていた。幕末の浪花百景に、長く続く白い塀が描かれている。傘が描かれているのは、荒野のような景色に内職の傘が舞っている図である。傘は当時のリサイクルの定番品で、油紙を張り替える貧しい人々の暮らしが滑稽に描かれている（図4）。

この二つの御蔵を1908（明治41）年の地図で改めて確認して見る（図5）と、御蔵へ向かっ



図5 1908年の天王寺御蔵跡と難波御蔵跡



ていた2本の堀川は、繋がっていたことがわかる。繋げているのは鼈川（いたちがわ）である。

高津入堀川は、道頓堀から天王寺御蔵跡まで掘られたが行き止まりであったため、水運の便も悪く、また停水して衛生上もよくなかった。そこで1896（明治29）年すでにあった鼈川と連絡されることとなり、1898（明治31）年2月に貫通工事が完了した。難波入堀川も、高津入堀川と同じ理由で1879（明治12）年鼈川とすでに繋がっていたので、このようにして2つの堀川が繋がった。

さて、鼈川とはどのような川なのだろう。時はずいぶん遡る。聖徳太子が四天王寺建立に着手したのは推古元年（593年）と言われている。聖徳太子は諸国から木材を集めた。その木材が、難波の海浜に住んでいた小野妹子の八男である多嘉丸の宅前に到着した。しかし、そこから上町台地にある四天王寺の建設予定地までの運搬方法がなく困っていた。

そんな頃、一匹の老いた鼈が海辺から現れ、荒凌（今の四天王寺がある場所）と海浜を行き来しはじめたので、人々はこれを怪しんでいた。多嘉丸は夢で鼈のお告げを聞き、鼈が走ったその場所を開削したところ、難なく水路が掘り進められた。この水路を使って木材を容易に運ぶことができ、無事四天王寺が建立された、との伝説である。この時に掘られた堀が鼈川である。四天王寺建立のため掘られたとすると、鼈川はおそらく大阪で最も古い堀川であろう。

鼈川の川筋をみると、「難波御蔵」の南に「浪花百景」に多く描かれている名所がある。いくつものフラッグが立っている（図5）。廣田神社と今宮神社である。廣田神社は四天王寺建立の時の守り神として設けられたとも言われ、四天王寺の鎮守である。今宮神社も厩戸王子（聖徳太子）の建立とされ、明治維新までは四天王寺が管理していた。いずれも四天王寺との関わりが強い神社である。鼈川沿いにはもう一つ四天王寺との関わりが強い名所がある。大国町の願泉寺である。願泉寺は、先に鼈川の夢をみた小野妹子の八男多嘉丸が開祖とされており、現在も小野家がこの寺を引き継いでいる。このように、地図と絵図を紐解くと、もつれていた場所のつながりがほぐれていく。

鼈川は徳川時代、今宮、木津、難波の田畑の用水として利用されていたが、先に記したように濁水停滞していた難波新川と繋ぐことにより汚水を流し出し、耕地灌漑用水として貫通工事がされた。この工事費の償還のために通船料や渡橋賃を徴収していた時期もあったそうだが、1899（明治32）年には市営となり、無料となった。

さて、「難波御蔵」、「天王寺御蔵」、「鼈川」のその後を追って見てみよう（図6）。「難波御蔵」跡は、水運を利用した「大阪専売支局」となっている。「大阪専売公社大阪地方局」のことである。1898（明治31）年葉煙草専売法が実施され、耕作者が収穫した葉煙草はすべて政府に納入することとなった。この収納所が大阪に設けられ、ここで加工も行われた。1925（大正14）



図6 大阪市及付近営業者紹介地図（大正3年9月17日発行）に見る難波御蔵、天王寺御蔵、鼈川



図7 現在の新川、入堀川、鼈川跡

年には従業員数約1700人を数える赤煉瓦の工場があった。残念なことに第二次世界大戦の戦災で焼失し、その後、大阪スタジアムとなり、南海フォークス本拠地球場となったが、当時から複合娯楽施設として様々に使われていた。住宅展示場になっていたことはよく知られている。現在はなんばパークスである。

「天王寺御蔵」跡は、御蔵跡町との地名を残して、1918（大正7）年御蔵跡公園となった。公園内には1921（大正10）年に市立御蔵跡図書館が開設されたが、1944（昭和19）年託児所に転用され、その後戦災で焼失した。この地には、もともと下駄職人が集まっていた。御堂筋拡幅の時（1926（大正15）年10月着工）に立ち退きとなった履物問屋がこの地に集団で移転し「御

蔵跡履物同業者街」として栄えた。戦前からの履物問屋街として全国的卸問屋街ともなっていた。戦後も賑わったが現在は名称のみ残り、実態は寂しいものとなっている。鼈川は田畑の市街地化とともに戦前から順次埋め立てられ、道路となっていった。芦原橋あたりが最後まで残っていたが、橋の名前に残るだけとなった。新川も入堀川も埋め立てられた。

大阪で最初に掘られた水運のための鼈川、大阪で最後に掘られた新川、入堀川はいずれも道路となっている。川には阪神高速道路が走り、大阪の重要な輸送の動脈であり続けている。集合住宅設計者の一言から始まった堀の探索、593年聖徳太子の四天王寺建立から始まる土木工事で描かれた線が、繋がったり、埋められたりしながら生き続けていることを確認できたのは、古地図で遊ぶ醍醐味である。

#### 4 古地図アプリを用いて地域を紐解く 事例2

##### 天満堀川をたどる

天王寺御蔵へ続く入堀、難波御蔵へ続く入堀、いずれも行き止まりで、物資運搬のために掘られたものである。行き止まりの堀が新地開発のはじまりであった。そんなことを確認した後で、大坂三郷及周辺図（17世紀中頃）を眺めていると（図8）、天満に行き止まりの堀を見つけた。入堀の行き止まりには何も書かれていない。より詳しく見るために、新撰増補大坂大絵図（1687年頃）で確認（図9）。堀川と記されている。

6つも橋がかかり、周辺には町家が並んでいるようだ。南から、門樋橋、樋上橋、樽屋橋、天神橋、塘門橋、寺町橋、そして樋門が描かれて行き止まりとなっている。この堀は、関ヶ原の戦いの前、1598（慶長3）年に掘られたもので、大阪市中でも最初にはじめに開削された堀川という。もちろん、先に紹介した鼈川はのぞくと、である。豊臣秀吉は、1583（天正11）年に大阪城の構築に取り掛かった。またその頃より、秀吉は堺や伏見の町人を大坂に移住させ、南洋貿易に当たらせていた。天満にはシャム（安南）と貿易をしていた茨木屋又左衛門が移住している。南洋に向かう商人のため



図8 大坂三郷及周辺図（17世紀中頃）に描かれている行き止まりの入堀





図9 新撰増補大坂大絵図（1687年頃）に描かれた、6つの橋のかかる門堀

に掘られた入堀だったのか。船場ができる前の大阪で、この辺りが船着であったのだろう。その後の大坂城冬の陣、夏の陣で、これらの商家は離散したと言われている。堀だけが残され、この周辺は荒廃していたのだろう。

17世紀末になり、橋が架けられ、再び商人が集まってきた。その様子が新撰増補大坂大絵図（1687年頃）（図9）に描かれている。改めてよく見ると、寺町橋の東と西には松

平忠明により寺町が作られ、さらにその北には、同心や与力の屋敷がある。樋門の先は細くなり、東に折れ、大坂三郷および周辺図にも描かれている屋敷地の北の池、「ふうふ池」に繋がっている。この池の名の起こりは、さらに時代を遡る。

旅に出た主の帰りを待つ女房が、一人で生きた末に、「さりともと思う心にはかられて、世にも今日までいける命か」と歌を詠み亡くなった。それを哀れに思った老人が、夫婦塚に添え、その後に池が二つ掘られたという説、もう一説ある。旅に出た主の帰りを待ちあぐね、女房は池に身をなげ、その後夫が帰ってきて後を追って入水したという夫婦愛を語った説である。いずれにせよ、地図には池は一つしかなく、ふうふ池と記されている。

さて、同じ堀川について、さらに時代を下って増収改正摂州大坂地図（1844年）で確認してみよう（図10）。堀の名前は、堀川と記され、堀の周囲は堀川町となっている。夫婦池はなくなり、夫婦橋がかかる堀となりその場所は夫婦町。堀川は東に流れ、淀川とつながっている。夫婦橋は、今の天神橋筋商店街と交差するあたりである。橋は、南から太平橋、樋ノ上橋、樽屋橋、天神小橋、堀川橋、寺町橋となった。入堀が作られて200年以上たち、河水は常に停滞し腐臭を漂わし、岸のほとりには塵芥が積み上げてあったので、「ごもく山」と呼ばれる土地となっていた。

1839（天保9）年3月、入堀を淀川に繋げる開削工事がなされた。延長7町50間、幅員6間の堀川となった。これは、1838（天保8）年2月に起きた大塩の乱による火災あとの難民救済のために行われた失業救済事業であった。異臭を放ち、塵溜めとなっていた堀川は、この整備



の後どうなったのか。江戸末期の名所を描いた浪花百景で確認することができる。堀川周辺を描いた錦絵は3枚(図11)。「堀川備前陣家」「北妙見堤」、「天満樋の口」である。いずれも堤に植えられた桜の名所として描かれている。堀川の整備は、観光の上でも大成功だったようだ。それぞれの絵をよく見ると、土地利用の変化も見えてくる。「堀川備前陣家」には、その名の通り備前陣家が描かれている。樋門が描かれ、その向こうに太鼓橋がかかり、櫓があり、いくつもの棟が木堀に囲まれて立っている。堀川の両岸の堤は桜の並木となっている。



図10 増収改正摂州大坂地図(1844)年に描かれた、6つの橋のかかる門堀



図11 浪花百景(江戸末期)に描かれた堀川  
(左:「堀川備前陣家」、中:「北妙見堤」、右:「天満樋の口」)



図12 大坂全図(1863年)に描かれた堀川  
北の曲がりに備前の文字の入った堀に囲まれた敷地がある

備前陣家を1863(文久3)年の地図で確認した(図12)。屋敷は、陣屋らしく堀で囲まれていることがわかる。備前陣家は、堀川の水路開削後に置かれたものである。「北妙見堤」は、夫婦池が堀川の開削整備とともに埋め立てられ、その跡地に作られた能勢家の屋敷と妙見堂に由来する。能勢家は、現在の能勢町地黄に城を構えていた徳川の家臣である。能勢氏が信仰する日蓮宗を能勢法華といい、守護神

として山頂に祀ったのが能勢妙見の始まりである。この辺りの堤を妙見堤と呼び、桜の名所であった。描かれている桜の木々は細く弱々しい。植樹間もない時期に描かれたのであろう。さらに美しい桜が描かれているのが「天満樋の口」である。天満堀川が淀川に合流するところに樋が設けられていたので、樋の口という。対岸の桜ノ宮と一体となって、ここも桜の名所であり、大川には屋形船が行き交っていた。

1885(明治18)年7月に淀川の洪水が起こった。水は2階軒下まで達し、天満橋、天神橋共に落橋した。そしてついに淀屋橋も落橋、北区内で難を逃れたのは、地盤が高くなっている天満宮の周辺だけだったという。天満堀川は酒造家や薪炭業者などの運輸に使われおり、その維持管理は沿岸の12ヶ町が負担していたが、この洪水のための壊れた堤の修繕に関しては、地元への負担が多すぎるということで、地元から区長に対し陳情書が出された。区長はこれを受けて大阪府知事に陳情し、維持修繕費は地方費をもって支弁されることとなった。1897(明治30)年修繕計画が立てられ、1899(明治32)年7月に改修を終えた。

完成した様子を1908(明治41)年正式2万分の1地形図に見ることができる(図13)。堀の幅員も一定となっている。特に、北の曲がりから淀川への水路は直線に整えられた。備前陣屋は、堀の一部を残したまま一時期は陸軍の兵営として使われ、1882年からは大監獄となった。図14には、大監獄の様子が描かれている。4000人を収監できる施設だったという。1895(明治28)年、大阪鉄道が敷設され、天満駅が開設された。周辺の市街化が進みはじめる。



さて、天満堀川はもちろん水運のための入堀であり、そしてその堤は桜の名所となっていたのであるが、この川にはもう一つ重要な役割があった。第一防火線としての延焼防止の役割である。1909（明治42）年7月31日午前4時、空心町（現在の天神橋1丁目あたり）のメリヤス工場から火が出た。天満宮は消防団の必死の活動に難を免れたが、火は天神橋筋2丁目から南森町を一掃し、天満堀川に至った。天満堀川は、第一防火線とされていたのだが、その両岸にあった竹屋が川中に差し出していた竹竿を伝って、火が西岸に移り、役に立たなかったという。こ



図13 正式2万分の1地形図（1908年）にみる天満堀川

の時の火事は第二防火線であった梅田新道、第三防火線であった緑橋（出入橋周辺）も火を阻むことなく燃え広がり、翌日8月1日の午前4時まで燃え続けた。この時の罹災状況は明治天皇にも伝えられ、救援金1円ずつが罹災全世帯に配られた。この残余預金で財団法人弘済会が設立された。現在は、大阪市の所管となり吹田市古江台の大阪市の高齢者福祉施設や病院を運営している。また、この時市吏員による義援物品横領が発覚し、当時の山下市長、藤村助役が退職するという事件も起きた。また、この大火の瓦礫で曾根崎川が埋め立てられ、市電道路となった。

周辺の市街化がさらに進み、1920（大正9）年には、大監獄は堺に移転することとなり、そのあとは扇町公園などとなった。1923（大正12）年大阪市パノラマ地図をみると（図14）、大監獄の跡地に、街区が作られ一部に工場、公園、乳児院が描かれているが、まだ更地も残っている。天満堀川にかかる橋の名前は扇橋である。これが扇町の所以である。

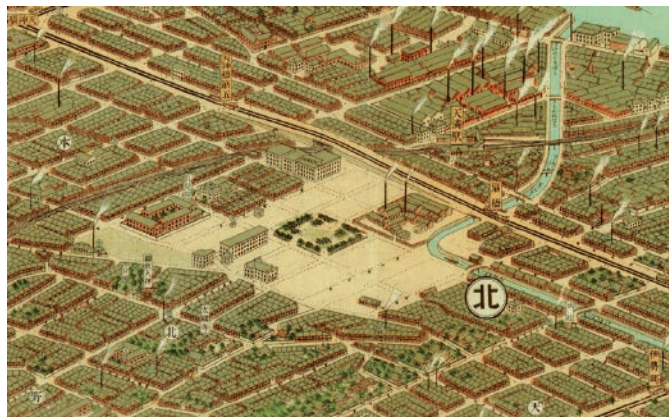


図14 大阪市パノラマ地図（大正9年）で、大監獄の跡地をみる

さらに1941（昭和16）年大阪市街地図（図15）で確認すると、大監獄の跡地は、北扇町、東扇町、西扇町と

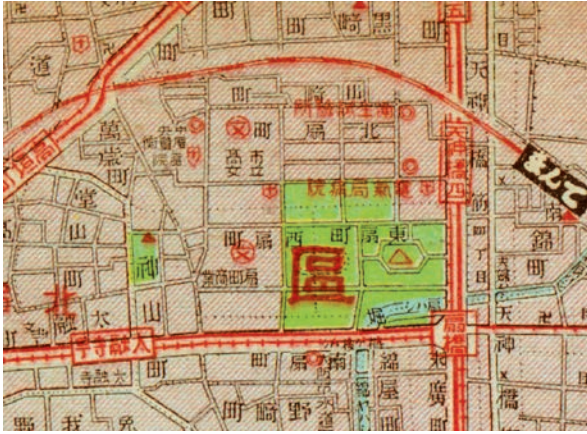


図15 大阪市街地図（昭和16(1941)年、日本統制地図株式会社）にみる大監獄の跡地



図16 現在（2018.1）の地図で見る扇町周辺

町名がつけられ、北扇町の西側街区は市立高等女学校、西扇町は扇町商業高校、東扇町は扇町公園となり緑色に着色されている。

最後に現在の地図で確認すると（図16）、大監獄後の扇町には北区役所、区民センター、関西テレビ放送株式会社、キッズプラザ大阪、市営扇町住宅、北野病院、市立扇町小学校跡地、大阪市立天満中学校がある。天満堀川は、1968（昭和43）年埋め立てられ、同年、阪神高速道路12号守口線（渡辺橋分岐一森小路）が開通した。

大阪城下ができる前に掘られた入堀がきっかけで荒地の中にできた備前陣屋の土地が、現在の北区の重要な公共用地となり情報と教育、福祉医療の拠点となっている。入堀は高速道路が上に載り、大阪近郊と都心を結ぶ重要な道路となっている。数

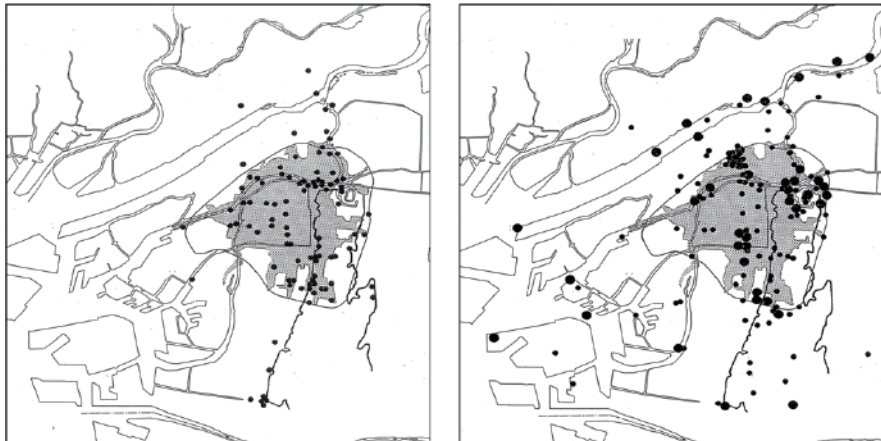
百年前に描かれた線や面が、現在の街を形作っているのである。

## おわりに

2つの事例は、いずれも堀川を手掛かりに「タイムダイブ」したものである。なぜ堀川に注目したのか。それは近代化以前は、堀川が重要な交通手段であったからである。新地の開発は堀川の開削が前提条件であり、堀川沿いに屋敷ができ、また商人が集まる。さらに歴史を遡れば、四天王寺建立のための堀川（鼬川）が開削され、その途中には守り神としての神社が置かれていた。現在、鼬川は埋め立てられ道路となっているが、神社は残りそこが重要な場所であ



ったことを今に伝えている。時に、堀川は澱み塵芥が積み上がるが、整備されると桜の名所にもなる。



浪花百景の描写地、幕末

大阪市民の好きな場所 1988年

図17 浪花百景に描かれた場所と、大阪市民の好きな場所

図17は、浪花百景に描かれた場所と、大阪市民の好きな場所（1988年調査）を比較したものである。地形の違いを確認しておく、幕末には海岸線の埋立地ができつつある頃で、新田開発が進められようとしていたが、港はできていなかった。現在の淀川は1910年に新淀川として開削されたものである。この新しい親水エリアに新しい「大阪市民の好きな場所」が生まれている。その一方、大阪環状線の内側に当たる幕末からの市街地における「大阪市民の好きな場所」のほとんどが「浪花百景」に描かれた場所となっており、大きな相違はないことがわかる。幕末にあった堀川の多くが現在埋め立てられ高速道路や幹線道路となっているが、地形や土地の持つ慣性力は現在も健在で、大阪の景観構造となっていることがわかる。

〔参考文献〕

- 「古地図で遊ぶ『大阪こちずぶらり』の楽しみ方」、「地図アプリ」を用いた街理解の検証とアプリの改善方向の検討研究会+大阪こちずぶらり研究会、2018年7月27日
- 「大阪のまちづくり—きのう・今日・あす—」、大阪市計画局、1991年3月31日
- 「浪速区史」、浪速区創設30周年記念事業委員会、1957年2月
- 「大阪の町名—大阪三郷から東西南北四区へ」、大阪町名研究会、清文堂出版、1977年9月
- 「北區誌」、大阪市北区役所、1955年6月15日

